コイルセンターの根津鋼材

「工場ペーパーレス」が定着

トレーサビリティを確立

急な変更も即座に対応

有力コイルセンター（CC）の根津鋼材（本社・東京都荒川区東日暮里、社長・根津訓光氏）では、全6拠点でペーパーレス化が定着。従来、事務所と工場との間でやりとりしていた加工指示書や工程表など種々の紙データを一切なくし、あらゆる上位指示や必要情報をモニタ画面表示に替えた。当初、慣れない一部の現場スタッフの戸惑いや抵抗感も今は払拭。軌道に乗り、新たなメニューを増やすなど進化の過程にある。（2面参照）

同社がペーパーレスしくみを構築した。

化に踏み切ったのは3年前の春から。須賀川、長沼、八潮、相模原、蓼科、浦安（当時は子会社の村田鋼業）の全6拠点を対象に、それまで事務所と工場との間で多用していた紙データを、すべて独自開発したコンピュータシステム上でファイルし、その情報をLAN経由で現場に配置したモニタ画面に表示する

現場のいたる所にモニタ表示

「紙」を介さず、自社開発システムによる電子データでやりとりすることで作業の効率化や時短はもちろん、急な変更発生時の伝達・指示の迅速化と情報共有化が図れる。

効率化、時短、負担軽減、人的ミス撲滅

加工指示や工程表、母材入庫リストや異常報告…。これらの情報伝達や指示の授受が、紙から電子データに切り替わった。異常報告通知システムの整備・運用に若干タイムラグが生じたが、一昨年からは完全ペーパーレスを実用化している。

同社は電機OA分野の直需向けを主体とする自販型コイルセンター（CC）。小ロット多品種・短納期の注文が多く、しかも加工明細の追加・差し替えといった変更が日々頻繁に発生する。

変更のたびに事務所の担当者は現場に足を運んで報告・指示するが、伝達部署が複数にまたがるので時間がかかり、急を要するにもかかわらず周知にタイムラグも生じるので現場作業を停滞させかねない。こうした作業効率の悪さが、スタッフの労務負担となり、何よりヒューマンエラーを招く原因となる。その際「伝えた」「聞いていない」の記録が残らないから、有事の際の責任の所在もあいまいになりかねない。

月3万5000枚がゼロに

ペーパーレス化は、これら問題を解消した。急な変更の際も、最新情報をリアルタイムにモニタ画面で周知し、時間差なくすべての当該部署で情報共有できるようになった。

事務所スタッフの労務負担が軽減したのはもちろん、システムによってデータを電子化したことで月間3万5千枚に及んでいた紙データを無くすことができ、しかも電子データとして保存しておけるのでトレーサビリティ（履歴追跡管理）の確立にもつながった。

梱包仕様、周知報告など新機能も続々

CC全6拠点で定着した工場ペーパーレス化。指示伝達や情報の授受・共有化をすべてシステムで行うようにし、事務所も現場もそれがすっかり当たり前になった今、生産管理を遠隔指示するといった〝応用展開〟にも発展しつつある。拠点によっては一つの事務所で複数の工場を管理・操作するわけだ。

また、同社が新たに運用を開始した「梱包モニタ」システムも、ペーパーレス化によって創発された好例の一つ。顧客から指定された梱包仕様を、今まではバンド仕様や外装、スキッド形状といった必要情報を項目ごとに数字化し、羅列するだけだったが、このほど簡潔な文字データと梱包イメージのイラスト画像を加えて50インチの大型モニタ画面に表示するようにした。

ペーパーは1枚も無い

労災情報や設備トラブル情報についても、従来から何か発生すると「全社メール」の形態で全社員のパソコンには送信伝達していたが、これでは工場勤務者にはリアルタイムには周知しにくい。

そこで、これら情報も現場のモニタ画面に一斉告知。他拠点で起きた有事を、誰もが同タイミングで把握することができ、次のアクションも起こしやすい。あわせて「いつ、どういう時に災害が発生しやすいか」という傾向も、過去の客観事実に基づいて表記されるので注意喚起にも寄与。設備関係では、ある拠点の設備が故障した場合、その原因が経年劣化だとすれば、他拠点にある同時期に設置した設備への〝備え〟を促すことにもなる。

◆　◆

ペーパーレス化をはじめ工場における各種自動化・省力化・省人化対策を積極的に推し進める根津鋼材。その要となるのが、トップがイメージする無限の可能性を一つ一つ具現化する中枢機能の「システム事業部」だ。今はまだ試行錯誤の連続かもしれないが、愚直に取り組んだ一つ一つの成果の積み重ねが「必ずや将来の競争優位性につながり、顧客と社員の満足度向上にも寄与する」（根津社長）と確信するだけに、進化を目指して歩を進めていく。